

第 3 回慢性腎臓病(CKD)セミナー

腎臓高血圧内科

一居 充

慢性腎臓病は、日本国民の 8 人に 1 人が該当する国民病です。腎臓が悪くなる原因には遺伝的要因から生活習慣病（糖尿病、高血圧など）、薬剤など様々なものがあります。腎臓は悪くなくても自覚症状に乏しい臓器で、その上一度悪くなると後戻りのできない（正常に戻らない）可能性のある臓器です。腎臓が悪くなると、心筋梗塞や脳卒中など腎臓以外の臓器の病気も発症しやすくなると言われています。

腎臓は、主に糸球体と尿細管とよばれるものから構成されていて、その構造は幼少期までにほぼ完成され、体内の調節機構として様々な役割があります。まず、腎臓は尿を作り出す臓器であることから体内の水分やミネラルバランスの調節や体内でできた老廃物の除去を行っています。これらの調節機能が低下すると体のむくみから呼吸困難となり心不全や不整脈などの原因になります。第 2 に腎臓ではエリスロポエチンとよばれる造血作用のあるホルモンを産生します。そのため、腎機能が低下している患者さんではエリスロポエチンも低下するため貧血（腎性貧血）になります。その他、ビタミン D という骨に関わるホルモンについて、ビタミン D は腎臓で活性化されることでちゃんと働くようになっていますが、腎臓の機能が低下するとビタミン D の活性化が低下することで骨が弱くなります。その中で重要になるのがリンとカルシウムになります。そもそもリンとカルシウムは本来体内に適量必要なミネラルですが、腎臓が悪くなるとリンは上昇、カルシウムは低下してしまいます。これらの変化は動脈硬化の促進にもなるため適切な治療介入が必要になります。

慢性腎臓病の治療は、これ以上腎臓が悪くならないように腎臓を悪くしている元の病気に対する治療と、腎臓が悪くなった時の合併症の治療などを食事・運動療法や薬物療法などで行っていきます。

今年度は、腎機能が低下した時の作用を中心に腎臓と薬物療法についてお話しさせていただきます。

